

七 調情の修養

「道心の中に衣食あり、衣食の中に道心なし」。衣食のみを追ふ者に道心去り、道心に住する者に衣食自ら備はる。「事たれば足るにまかせて事たらず足らで事たる身こそ安けれ」。この道理妙味を忘れて、徒に金銀財寶に齷齪すれば、夢に夢みる夢人となつて仕舞ふ。

金拾ふ夢は夢にて夢の中、糞すると見し夢はまさ夢

夢は醒めたが、脱糞は残る。残る脱糞の始末に困つた處で

夢さめてみれば恥かし寢小便 恥かしと未だ夢さめぬ寢惚坊

これは獨逸文豪の小説の筋であります。至つて金の好きな日稼男。日々車を牽いたり手傳をしたり、働いては蓄め、貯めては働き、銀行へも預らずに筆筒に納つて置いて、折々取出して紙幣を列べて見ては喜んで居る。今晚は夕飯後、女房は下男を連れて用達に出て行く。四五歳の子供と二人残つた主人例の通り紙幣を出して眺めて居る。是は斯う云ふ時貰つた。これは斯うして儲けた。これは恁であつたと、種々の思出に紙幣を拵つては、獨り悦に入つて、煙管に火をつけることさへ忘れて居る。「オ、煙管さん、火がつかかなかつたな、道理で煙が出ない」とマッチを摺つてポツと投げ、「もう歸る頃だが」と、子供を残して表へ出掛けた。

捨てられたマッチの火は其儘消えないで、下の新聞紙についてヂリク／＼燻る。子供は無邪氣なものだ。何心なくそれを見て面白くなり、消えさうな火を再び燃やすため、其處に置いてあつた紙幣を持つて行つて燃やす。一枚二枚五枚八枚、だん／＼と燃やしては喜ぶ。澤山の紙幣の束を燃やし切つて最後の一枚、もうおしまひだと云ふので、永く持つて居たため、指を焼いてアツと叫んだ途端主人が戻つて来る。見ればこの有様。石のやうに堅くなる。

刹那、子供は父の歸りを見て「お父さんも少し紙を下さい、焼いて遊ぶから」
大切な紙幣も子供には紙切同様。この優しい聲は父に何と響いたか。男は前
後不覺に夢中になつて、「何ッ畜生ッ」子供の襟首ヒツ掴んで矢庭に投げつけ
た。子供はしたゝか壁の柱に當てられて、グウの音もあげず、頭蓋はくだけ
脳漿はあふれて、見るも悲惨な最後。氣付いた時はもう遅かつた。父は茫と
して段梯子を二階へ上つた。

暫くして女房が歸つて來た。家の中は眞暗である。「あら燈もつけないで」。
「旦那様今歸りました」返辭がない。不審など、家に入つて下男が手燭を點す。
その途端に子供の無残な死骸が目に入る。母は不意の叫びに卒倒してしまつ
た。下男は男だけに主人を捜そうと、隣の室に入つた時、主人の帽子に躓い
た。「旦那様は上に居られるんですか、歸つて來ました、下りて來て下さい」
叫んだが答がない。梯子を上つて三足四足進めば、頭と肩とに抵抗するもの
がある。初めは押へ付けるやうに、次でそれが割け、二つに分れた。何か重
いものが頸に載さつた。又のやうな氣がする。と見れば、二本の堅くなつた
足が胸にかゝつて居る。アツと仰げば、主人が縊つてぶらさがつて居る。ヒ
ヤツと驚いて取り離す蠟燭と共に、下男は後に倒れ落ちて、うんと云ふ程頭
を打つた。落ちるまで消えなかつた蠟燭は、フワリ積んである藁につき、忽
ちに焰をなし、家は火に包まれて、形もない灰になつてしまつた。灰の中か
らは哀れな四つの髑髏が出て來たばかり。

人よ、是を以て唯一篇の小説とのみなし終り得るか。思へば私共、毎日
斯様な轉變破壊を繰返して居るのではあるまいか。あれが欲しい、これが欲
しい。彼奴が悪い、此奴が憎い。あれがあつたら、これがなかつたらと、唯
自分の欲望にのみかられて、いろいろの理窟をつけて、その邪見高慢氣儘

我が儘を辨解して居る。いつしか俺こそはと偉くなつて居る。恩を仇に返し、情を怨に酬ひ、みんなを足蹴にして自分一人偉くならう、樂をしやうと云ふ恐るべき惡念を、いろくに辨解して、いゝ氣になつて斷行せんと企てる。先輩が邪魔になる、それも葬つたらよろしい。恩人が邪魔になる、夫も絶縁したらよからう。自分は自分で遠慮なしにやる。それが男の本領である、現代人である。などと飛んだ處に力味を入れて、惡魔の跳梁を煽つて居るのではない。見よ欲樂生活の果を。思へ耽溺生活の終を。恐しい破滅の外はないか。かくて私共は云何しても如來に歸依して、現在の清心を保たずに居られませぬ。